

ニュースレター No.39 2001年(平成13年)10月

NEWSLETTER

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

財団法人 国際湖沼環境委員会

- よりよい湖沼管理をめざして ---

このニュースレターには英語版もあります。

世界湖沼ビジョンに向けて

沼は重要な存在である。 しかし湖沼はその利用価 値を損ねるような多くの 重圧に直面している。一この話は 今に始まったことではない。皮肉 なことに、湖沼に真の価値がある からこそ、人々は流域で暮らし、 働き、遊ぶために集まってくる。 汚染や土地利用における変化は、 必然的に湖沼に影響を与える重圧 を招き、湖沼の価値を損ねている。 リビングレイクスのエイトケン・ クラーク氏は湖沼についてこう述 べている。"我々は湖沼に手をかけ すぎて死なせているのだ"何か行 動をおこさなければならない。

この "何か"が、ILEC主催で最近行われたワークショップ「世界の湖沼の将来:行動に向けての指針」の焦点となった。ワークショップは、本年9月4日~6日までの3日間ILECにて開催され、"世界湖沼ビジョン (仮名)"として知られるプロジェクトについて話をすすめるため、世界各地から22名が参加した。

過去数年はILECが何をすべきかと 深く追求する時期でもあった。 ILECは、世界の湖沼と貯水池の持



活発な議論を繰り広げるワークショップ参加者たち

続可能な管理の促進を目指すという目的で1986年に設立された。この目的を遂行するため、ILECは過去現在を含む多くの世界湖沼会議(第9回は本年11月に開催)に開催組織として関わり、世界の湖沼データブックの編集、湖沼管理におけるガイドラインブックの作成、科学ジャーナル誌の発行および若い湖沼管理者を育てるための研修実施などを行ってきた。

このような成果にもかかわらず、世界のほとんどの湖沼が持続不可

能な状態での管理のままである。これまでのILECの取り組みは、持続可能な湖沼管理の指針などをトップレベルの意思決定者に伝えでいるが欠けていた。"ビジョン"はこれを実践する効果の対している。世界湖沼ビジョン"はこれを実践するが果からである。世界湖沼ビジョンである。世界湖沼ビジョンは、世界の別別である。カークションは、世界はなるの見なる一歩となる。ワークションに関する音楽をとは、次頁に掲載しています。

今回

- 世界湖沼ビジョンに向けて
- 第9回世界湖沼会議に向けて

0

● UNEP-IETC/滋賀県/ILEC 共同シンポジウム

話題

- 国際水環境フォーラム
- 湖沼会議支援写真展

- UNU ワークショップ
- 第6回リビングレイクス国際会議
- 世界の湖沼 ビクトリア湖
- 第11回生態学琵琶湖賞
- 第2回環境教育研修

9月にILECで行われたワークショップ の結論の主な概要は次のとおりです。

なぜビジョンが必要なのか?

世界銀行のラフィック・ヒルジ氏は、 湖沼は人類にとって限りない価値をも つが、我々湖沼管理者はこのような価値を意思決定者らに明確に伝えること を実施してこなかったと最初の段階から明らかにした。ILECのトーマス・バラトール氏は、世界水ビジョン(WWV)で湖沼問題が重要視されなかったことに落胆したことを述べ、現状のWWVは湖沼管理の適切な指針には十分ではないことを強調した。世界規模のビジョンが、持続可能な湖沼管理を促進するために次に求められる施策であることに同意された。

ビジョンは何を意味するのか?

ビジョンは、長期にわたる目標および 達成に向けての計画を具体化するもの である。人の頭の中で描けるもの(自 分の家族のための計画など)でもあり、 公式の書面(世界水ビジョンと実践枠 組み)としても作成される。ビジョリしても作成される。ビジョリしては、2つの異なる評価基準が重要となる。まず、琵琶湖の"マザーレイと」である。まず、琵琶湖の当沼に対するビジョンである。このようなビジョンに、 定められた湖沼の長期管理計画を詳細にするものである。次に、あらゆる 沼についての中心的、世界的規模のビジョンである。ILECでは、これを"世界湖沼ビジョン(仮称)"と呼んでいる。これは、持続可能な湖沼管理のための原則を述べ、国際的な議論の場において湖沼の評価を高く位置づけることを目的に策定される。また、各湖沼ビジョンの考案の指針となると同時に、既存の湖沼ビジョンについても紹介される。同ビジョンの概要は最後に記してあります。

ビジョンは誰のためのものか?

世界湖沼ビジョン(WLV)は、広い意味で2者のためのものである。まず、個々の湖沼管理の責任者が、個別の湖沼ビジョンを考案する指針としてWLVを用いることが望ましい。次に期待しているのは、環境分野で計画を行う国際的組織をターゲットにすることにより、国際的な議論の場で湖沼プロフィールが取り上げられることである。

誰が展開していくのか?

ワークショップ参加者からは、ILECが世界湖沼ビジョン策定の指揮を取っていくべきだという強い要望が出された。ビジョンが正当化されるためには、幅広い人々の関与が求められる。すなわち、参加が秘けつとなる。最終的には、あらゆる人々が策定プロセスに貢献しWLVを作りあげていくことになる。草案および編集はILECが行う。投稿に関

する詳細は、この記事の最後に掲載し てあります。

(1)?

世界湖沼ビジョンにつながるプロセスは、2003年3月に京都で開催される第3回世界水フォーラムで完結される予定である。それまで、世界湖沼会議(2001年11月日本で開催)、ダブリン+10(2001年12月ボンで開催)、ストックホルム水シンポジウム(2002年8月ストックホルムで開催)およびリオ+10(2002年9月南アフリカで開催)など様々な国際イベントで必要な情報・アイデアが収集される。また、電子フォーラムでも今から2003年まで情報収集が展開される。

情報・アイデアの投稿募集

ここまで目を通していただいた方々は、おそらく世界湖沼ビジョンに興味をもたれたことと思います。このプロセスへ情報・アイデアを投稿を希望される方は、ぜひILECのホームページwww.ilec.or.jpにアクセスしてみてください。WLVのドラフト、ポジションペーパーおよび9月に行われたワークショップの議事録もご覧になれます。また、WLVを取り上げた様々な電子フォーラムへのリンクもあります。Eメールtom@ilec.or.jpまでご意見をお送りください。

世界湖沼ビジョンの概要

- 1. 明確なビジョンをもつ声明書:リビングレイクスのエイトケン・クラーク氏は、WLVは人々を惹きつける声明 書が必要であると主張した。
- 2. 湖沼の価値:ラフィック・ヒルジ氏は、途上国に湖沼の価値および不十分な管理で失われた価値を示す方法を見つけなければいけないと述べた。トーマス・バラトール氏は、世界中の人々から湖沼の価値を示す事例を引用する提案をした。
- 3. 湖沼への圧迫とその影響:湖沼が直面している問題については多く記載されている。我々は、このような問題を引き起こした原因についても注目しなければならない。
- 4. 湖沼管理のための原則: GWPのビョン・グテルスタム氏は、"栄養物は、資源であって汚染物質ではない"というような"全世界的な"原則を確立することをWLVに求めた。レイクネットのリサ・ボーレ氏は、"参加"の必要性を強調した。優れた統治管理と同時に前進的アプローチについても述べられた。
- 5. 原則の実施例:上記の原則は事例を通して示される。
- 6. 行動計画:計画なしのビジョンは、幻想である。

ビジョン策定の全体として、湖沼の重要性および持続可能な管理の原則について幅広い人々に伝達できるように分かりやすい英語で50~100ページの文書として作成することが望まれる。

第9回世界湖沼会議 BIWAKO2001に向けて S.E. ヨルゲンセン ILEC科学委員委員長

1回目の世界湖沼会議が1984 年8月に滋賀県大津市で開催され、本年11月に第9回目の世界 湖沼会議が再び大津で開催される。財団法人国際湖沼環境委員会 (ILEC) は、 滋賀県とUNEPの協力を得て1986年2 月に結成され、それ以来世界湖沼会議 の支援組織として同会議に関わってきた。

世界湖沼会議は、毎回異なったテーマや問題をとりあげて行われるため、その結果参加者の層も毎回異なってくるという点も特徴的である。ヨーロッパで開催された3回の会議(ハンガリー、イタリアおよびデンマーク)は、より専門的で管理問題を優先にした内容であったが、日本での3回の会議(琵琶湖/1984年、2001年と霞ヶ浦/1995年)は、NGOの役割や住民意識といった問題に焦点をおいている。第9回世界湖沼会議のプログラムでは、住民意

識、湖沼管理の社会経済的問題および NGOとの相互関係などの内容も分科会 でとりあげられる。湖沼管理は、"無味" とは決していえない管理および技術で あり、興味深い専門分野であるため、 このように会議が異なる内容で開催さ れるということは重要なことである。 また、"湖周辺の全住民が、湖沼の水質 と環境をより良くすることに関心を向 けるにはどうすればいいのか?"とい ったような問題もある。残念ながら、 適切な湖沼管理として成功といえる例 はほんの少しであるが、それらはすべ てあらゆる手段や器機を同時に大量に 用いることで特徴づけられ、集水域の 全住民が少なくともある段階まで問題 を理解し、解決に向けて協力しあうこ ともまた必要とされることである。適 切な湖沼管理で扱われる専門分野の範 囲はたいへん幅広く、すべての湖沼会 議ですべての専門分野を同じレベルで 焦点をあてて取り扱うのは、ほとんど 不可能である。

第10回世界湖沼会議はおそらくシカゴ での開催となり、専門性と管理の適用 などを優先した内容となるだろう。そ の次の第11回の会議はおそらくケニヤ が開催地となり、どのようにして途上 国の水資源を保護するための支援がで きるのかということがテーマとなって くるだろう。

9回世界湖沼会議でも勿論興 味深い専門的な論文はいくつ か発表されるが、琵琶湖はあ らゆる活動分野の中心になるであろう。 しかし、レイクウオッチ25 (Lake Watch 25) というタイトルの発表では、 琵琶湖を含む25の湖沼の水質や生態系 の状態を評価する発表が行われる。 我々は、成功と失敗からどのようなこ とを学べるのか?琵琶湖を対照にして 25の湖沼について検討するという考え である。すべての湖沼から一般的な内 容の話が出されるだろう:湖沼管理に ついてもっと努力すれば、もっとよい 結果が得られる。しかし、湖沼管理の 成功を確実にするには、同時に前に述 べたとおりあらゆる可能な手段を用い なければならないのである。ここで述 べたいのは、住民の意識づけがどれほ ど重要であるかということである。よ って、第9回世界湖沼会議はたいへん 興味深く、開催を楽しみにしている。

第9回世界湖沼会議協賛

UNEP-IETC/滋賀県/ILEC共同シンポジウム 湖沼管理における住民と地方自治体とのさらなるパートナーシップの促進

2001年11月8日 (木)、9日 (金) 9:30~17:00 会場:琵琶湖博物館ホール (滋賀県草津市)

第9回世界湖沼会議に合わせて開催されるUNEP-IETC/滋賀県/ILEC共同シンポジウムのプログラム内容が9月に開かれた第5回共同シンポジウム実行委員会で決定した。

1日目は、レイクネット (USA) の主宰者であるリサ・ボーレが基調講演を行い、ひき続き「住民と地方自治体とのパートナーシップによる湖沼管理の事例に学び、いかす」をテーマに世界各地の住民・行政の代表者による事例発表が行われる。参加する湖沼は、琵琶湖 (日本)、ラグーナ湖 (フィリピン)、バイカル湖 (ロシア)、ペイプシ湖 (エストニア、ロシア)、モノ湖、シャンプレン湖 (USA)、ビクトリア湖 (ケニア、タンザニア、ウガンダ)、チャパラ湖 (メキシコ)、タウポ湖 (ニュージーランド) の全9 湖沼。琵琶湖からは、住民代表として粉せっけん運動の活動などで有名

な「びわこ会議」(「びわ湖を守る水環境保全県民運動」 県連絡会議)が事例紹介を行う。また、特別プログラムとしてUNEP親善大使の加藤登紀子さんがゲスト出演する予定。

2日目は、前日にひき続き湖沼の事例紹介が行われた後、「住民と地方自治体とのパートナーシップによる湖沼管理を国際的に支援する枠組み」をテーマに国際NGOの代表者による事例紹介が行われる。発表を行う国際NGOは、ICLEI国際環境自治体協議会、レイクネット、リビングレイクスの3組織。その後、「湖沼管理のための全世界的な市民アライアンスに向けて」のテーマでグループ討論を行う予定。

シンポジウムへの参加は無料で、定員は200名。

参加の申し込み・お問い合わせ:

(財)国際湖沼環境委員会 共同シンポジウム担当まで

電話:077-568-4576 FAX:077-568-4568

E-mail: jspalm@mail.ilec.or.jp

圓際水環境フォーラム

Global Water Environment Forum 第9回世界湖沼会議サイドプログラム

湖沼保全のグローバルビジョンとパートナーシップに向けて

日 時 2001年11月10日(土)9:30~17:15

場 所 ピアザ淡海「ピアザホール」 滋賀県大津市におの浜1-1-20 電話077-527-3311

■ フォーラムのねらい

- ① 世界の淡水資源問題における湖沼問題の位置づけを明らかにする。
- ② 「湖沼の未来:とり組みの基本方針(湖沼保全のグローバルビジョン)」に関するこれまでの議論の概要を紹介する。
- ③ 湖沼保全のグローバルビジョンにおける「統合的水資源管理 (IWRM)」の意味について議論する。
- ④ 湖沼保全のグローバルパートナーショップの構築に向け、参加者や参加機関の連携を強化する。

使用言語 日本語および英語(同時通訳付)

対 象 市民、行政、NGO、専門家等 定員200名

主 催 滋賀県、グローバル・ウォーター・パートナーシップ (GWP)、国際湖沼環境委員会 (ILEC)

共 催 UNEP-IETC WWAP Lake Net Living Lakes NALMS

「琵琶湖と世界の湖沼に期待する世界水フォーラムへの貢献」

参加方法 参加費無料、当日自由参加 *電話、FAX、E-Mailでの予約可

開催事務局 滋賀県琵琶湖環境部環境政策課 企画管理担当

滋賀県大津市京町4-1-1 電話 077-528-3450 FAX 077-528-4844 E-Mail deoo@pref.shiga.jp

尾田榮章 第3回世界水フォーラム事務局長

■プログラムの主な内容■

開会メッセージ 滋賀県知事 國松善次 [第1部] 水資源問題と湖沼保全の課題

「GWP(グローバル・ウォーター・パートナーシップ)が期待する湖沼のイニシアティブトルキル・ヨーンチ・クラウセン GWP技術諮問委員会(GWP-TAC)委員長

「ワールド・レイクウォッチ25:変貌する世界の代表的湖沼」 スベン・ヨルゲンセン ILEC科学委員長 「世界の淡水資源:その評価と求められる湖沼の価値の反映」 今村能之 世界水評価計画 (WWAP)・UNESCO

「湖沼保全の鍵を握る地域住民とNGO: NGO-GOパートナーシップシンポジウムから」

グレッグ・ホワイトサンド 滋賀県-UNEP-ILEC共同シンポジウムコーディネーター

「始動する湖沼保全のグローバルビジョンに向けたe-Forum」

トーマス・バラトール ILEC研究員、ヴィクター・ムハンディキ ILEC研究員

[第2部] 事例とパネル討論

「湖の生態系保全と流域開発をめぐる葛藤:琵琶湖とナクル湖」 ファシリテーター 中村 正久 ILEC科学委員・滋賀県琵琶湖研究所長 松井三郎 ILEC科学委員・京都大学教授

事例報告

「琵琶湖の総合開発からマザーレーク21計画へ:地域と市民が創る生態系保全の時代」伊藤 潔 滋賀県琵琶湖環境部管理監「フラミンゴは守れるか:ナクル湖における生活と生存の葛藤」

ロバート・ヌデテイ 湿地研究専門家 (ケニヤ野生生物事業)、ジャクソン・ライニ 生態学者 (世界保護基金、ケニヤ)、W. J. マブラ イジャートン大学教授 (ケニヤ)

一般参加者およびILEC・GWP委員を交えた討議

第9回世界湖沼会議支援写真展

水辺の暮らしはどう変わったのか ~ 今昔写真でみる世界の湖沼の100年

この事業は第9回世界湖沼会議の支援事業として、日本財団の支援を受け、財団法人国際湖沼環境委員会と滋賀県立琵琶湖博物館が中心となり、湖辺や集水域での人々の生活を背景に100年前から現在への湖沼環境の変貌を今昔写真を通じて振り返り、今後の水と人間の望ましい在り方を探っていこうと思います。

なお、写真は滋賀県立琵琶湖博物館を始め、フランス・パリ自然史博物館、スイス・レマン湖博物館、アメリカ・ウイスコンシン州立歴史資料館、アフリカ・マラウイ大学などの貴重な記録写真をお借りしていますので、是非一度ご覧下さい。



《東京会場》 2001年10月2日~10月28日

銀座ギャラリー (丸の内線銀座駅、日比谷線日比谷駅間歩道)、滋賀銀行東京支店内

《大阪会場》 2001年11月1日~11月7日

曽根崎地下歩道 イベント広場 (JR東西線北新地駅 隣接歩道)

《滋賀会場》 2001年11月13日~11月18日 西武大津ショッピングセンター6階催事場

UNUワークショップ

国際水系として重要な役割をもつ湖沼と貯水池

ところ: 滋賀県 大津プリンスホテル

淡海コンベンションホール

とき: 2001年11月14日

国連大学主催

UNUが主催する同自主企画ワークショップは、統合システムとして湖沼系管理の国際的側面に焦点をあてた世界湖沼ビジョンに関連して開催されます。

UNUは、世界湖沼ビジョン開発の国際水系部分の責任を担っているのと同時に、国際水系管理についての経験と予備知識を活かせる立場にもあります。世界の湖沼系の多くが2ヶ国以上にまたがっているという事実は広く認識されておらず、国際河川系管理の手段などについて議論が交わされてはいるが、ほとんどの人々が国際水系として湖沼の自然についての意識をもっていません。湖沼は、水質、湿地の生態系、動植物相および流域管理などの観点から主に考えられてきました。

プログラム

- ■19:00-19:20 開会挨拶および基調講演 (鈴木 基之教授 日本国連大学副学長)
- ■19:20-19:30 ワークショップおよび講演者の紹介 (高橋 裕教授 日本国連大学)
- ■19:30-19:50 南アメリカにおける持続可能な水資源: ラ・プラタおよびアマゾン川流域 (ジョセ・G. ツンディシ ブラジル 国際生態研究所 *ILEC科学委員)
- ■19:50-20:10 アフリカの持続可能な水資源管理における発展問題(クリス・H.D.マガッツァ教授 ジンバプエカリバ湖研究所 *ILEC科学委員)
- ■20:10-20:30 国際水系としてのカスピ海(ジェナディ N. ゴルベフ教授 ロシア モスクワ州立大学)
- ■20:30-20:50 国際流域管理の組織的側面-メコン川流域の経験から(中山幹康教授 東京農工大学)
- ■20:50-21:10 ドナウ川:統合された河川流域管理の必要性 (リバー・ジャンスキー博士 日本国連大学)
- ■21:10-21:40 パネルディスカッション (モデレーター:高橋裕教授)
- ■21:40 閉会挨拶

ビクトリア湖 (ケニヤ、タンザニア、ウガンダ) _{ビクター・ムハンディキ}



8,800 km²の表面積を有するビク トリア湖は、世界で2番目に大き く、アフリカでは最大の湖水体で ある。湖は、ケニヤ(6%)、ウガンダ (45%) およびタンザニア (49%) の 3つの東アフリカ諸国をまたがる位置 にある。集水域は184,000 km²で、ブ ルンディ、ケニヤ、ルアンダ、タンザ ニアおよびウガンダの5ヶ国に広がっ ている。ビクトリア湖は、比較的浅い 湖で最深84m、平均水深は40mほどで ある。また、湖北部は赤道に接した位 置にある。長く複雑に入り込んだ湖岸 線には、小さく浅い湾や入り江が無数 に存在する。その多くは沼地や湿地が 含まれるが、それぞれがまったく異な っており、また湖そのものとも大きく 異なっている。というのも、ビクトリ ア湖の水深は浅く、表面積がずっと小

ビクトリア湖のデータ

標高(m)	1, 134
表面積(km²)	68, 800
水容積(km³)	2, 750
最大水深 (m)	84
平均水深(m)	40
湖岸線の長さ(km)	3, 440
滞留時間(yr)	23
集水域 (km²)	184, 000

さい他の東アフリカの湖沼よりも水容積が実質上少ないからである。例えば、ビクトリア湖の水容量はタンガニーカ湖の15%であるが、タンガニーカ湖の表面積はビクトリア湖の半分以下の大きさである。

マクトリア湖の社会経済的重要 性は、地元および世界的にみ て大きな意味をもっている。 流域で生活する2000万人以上の住民は、 湖およびその集水域からすべての生計 を立てている。湖は、地元の人々や輸 出用の主な魚肉タンパク源となってお り、湖に生息するシクリッド(カワス ズメ科の淡水魚) は、観賞用魚類とし て世界中の水族館に輸出されている。 また、湖の水は家庭用水、農業灌漑お よび水力発電にも利用されている。さ らに、湖はスーダンやエジプトの重要 な水源であるナイル川の源のひとつで あり、ナイル川はビクトリア湖唯一の 流出河川である。ビクトリア湖はまた、 沿岸を所有する三ヶ国の間を行き来す るための重要な輸送手段の役割ももつ。 過去20年以上にわたり、人類活動の影 響によってビクトリア湖は水質および 生態系に劇的な変化を経てきた。集水 域の急速な人口増加に伴い、湖への汚 染も増大し水質悪化をまねく結果とな った。湖への汚染源は、1. 下水放流 2. 農業排水 3. 山林伐採や過放牧 により集水域の土壌浸食が起こってで た堆積物 4. 食品および魚類加工工場、ビール醸造工場、製革所、繊維工場および製紙工場を含む、集水域にあつまる多くの工業から排出される産業廃水、などである。これらすべての汚染要因は、湖への栄養供給を増大させ、結果的に富栄養化を引き起こすことになる。藻類の大量発生や頻繁に魚が死ぬといった報告が湖でしばしばされている。

◆年、ビクトリア湖の深刻な富 栄養化の状態は、富栄養水体 に繁殖する浮草であるホテイ アオイの大群生の発生により明らかで ある。1989年にはじめてこの浮草が湖 に発生し、その後ひとつの地域から次 から次へと発生し密生を形成していっ た。このような群生が湾もしくは港に はびこった場合、漁業や輸送で湖に依 存している地元住民の生活を麻痺させ ることになる。しかし過去2年にわたっ て、こういった浮草の管理において大 きな成功例が報告されている。これは、 2種類のゾウムシ (Neochetina eich horniae および Neochetina bruchi) を用いた生物学的制御によるものが主 である。また、パピルス(カミガヤツ リーカヤツリグサ属の大型の水草)や カバクサ(Vossia cuspidator)といった 水草が、枯れたホテイアオイの群落上 に繁殖するといった生態学的遷移も観 察されている。

また、湖は1950年代に湖に導入されたナイルパーチやナイルテラピアといった2つの外来種が原因で、湖固有の魚類が絶滅するという問題もかかえている。"世界の資源と環境2000-2001"の報告によると、1970年以前にはビクトリア湖にはシクリッド属(カワスズメ科の淡水魚)から350種類以上もの魚類が生息していたという。その90%が湖特有の魚類であった。固有種であるシクリッドのほとんどが絶滅したように、ナイルアカメやテラピアの導入によって湖固有の生態系が崩壊された。地元

漁業関係者にとってはいずれの事態も 痛手となった。

ほとんどが外国所有である漁業会社は 競争率も厳しいため、漁業関係者の多 くは唯一の収入源を確保するために大 量の漁獲をどうしても得なければなら ない。それゆえ、何トンものパーチが 食用で外国に運ばれ、およそ4億米ド ルもの利益が沿岸の3ヶ国の年間輸出 収入としてもたらされている一方で、 湖周辺の住民はたんぱく質の栄養不足 になるといった大きな格差が生まれて いる。別の言葉に言い換えれば、湖の 生態系の悪化による被害を最も被るのは、生態系に直接生計を依存している貧しい人である。ビクトリア湖の経験の中で、1950年に行われた例として漁業生産を増大するという同じ試みに直面し、今日においてまた外来種を導入して同じ決断をするかどうか考えているところである。

しかしながら、湖にとってあらゆる希望が失われたわけではない。湖が直面している深刻な問題に取り組む計画がいくつか進行しており、たいへん励みになる。例にあげると、世界銀行から

の資金提供によるビクトリア湖環境管理計画 (LVEMP) である。沿岸の3ヶ国は、湖の適切な保全に向けた共通の基準、政策および慣例を展開し、現在のところ進捗状況は良好である。ビクトリア湖の管理において考慮しなければいけない重要な点は、湖は何年もかけて現在のような状態に悪化していったわけで、再生するにはより長い時間と多くの努力が必要になってくるのを理解しなければいけないということである。

第11回生態学琵琶湖賞

授賞式: 平成13年10月6日(土)午後2時30分~午後5時 琵琶 湖ホテル3階「瑠璃の間」(JR大津駅徒歩15分) あわせて、受賞記念講演も行われます。

受賞者紹介

●占部 城太郎 (うらべ じょうたろう) 氏

京都大学生態学研究センター 助教授

「湖の食物網と栄養バランス - 琵琶湖 をささえるプランクトンの世界」

同氏は、湖沼の食物網の動態解析に 生態学的化学量論に基づく新たな視 点を導入し、動植物プランクトンを 中心とした湖沼生態系の物質循環過 程を明らかにした。この成果は、オ

リジナリティーが高く国際的にも極めて高く評価されており、 学術的な貢献度は大きい。

●Ahyaudin B. Ali(アヤウディン ビン アリ)氏

マレーシア科学大学生物科学部 教授「アジアの調和のとれた稲作農業生態系:長年に渡って培われた水生生物多様性の保全、最適化そして理解へのアプローチ」

同氏は、マレー半島の淡水魚の生態学、 特に湿地生態系の淡水魚の保全や管理 について研究を行ってきた。主要な研 究業績は、マレーシアにおける水田養



魚に関する一連の生態学的な研究である。魚類とその生息環境 についての知見を高め、マレー半島における淡水魚類に関する 種のリストの完成に貢献した。

詳細は、生態学琵琶湖賞 ホームページをご覧下さい。 http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html

第2回環境教育研修

本年10月1日から「水環境を主題とする環境教育」研修がILECにて開催される。同研修コースは、昨年に国際協力事業団(JICA)と滋賀大学の協力のもとスタートし、今年が2回目の開催となる。

バングラデシュ、カンボディア、コロンビア、ガーナ、インドネシア、ラオス、フィリピンの7カ国から8名の研修生が、9月30日から11月18日までILECの宿泊棟に滞在し、11月に開催される第9回世界湖沼会議に参加する。

このコースは、若手の大学教官(高等教育機関の教官)に、水環境を中心とした環境教育の考え方、内容、方法等を実例・現地視察を交えて指導することにより、環境教育の充実・発展に資することを目的としている。

同研修が開催される背景として、地球規模の 環境問題に加えて森林破壊、水質汚染、廃棄物 など発展途上国において特に深刻な環境問題を 長期的に解決していく必要に迫られているとい う状況がある。その為の手段として環境技術、 行政的手段が採られてきたが、社会全体での取 り組みの強化および長期的な効果の確保の為に は、特に次世代を担う子供達への環境教育は、 極めて重要である。しかしながら途上国におい ては、環境教育の指導者育成に携わっている若 手の大学教官は、数においても質においても極 めて限られているので、それらの養成のための 支援が大変重要になっている。これまでILE Cが試行してきた途上国向け環境教育研修の参 加者や現地協力者からも政府レベルのそのよう な支援の重要性が指摘されているところであ る。

第6回リビングレイクス国際会議



6回リビングレイクス会議が 「湖沼地域における水質と伝 統」というテーマで2001年7 月30日~8月3日にかけて、ロシア連邦 プリヤート共和国首都ウランウデおよ びバイカル湖畔にて開催されました。 19のパートナー湖から160人以上の専 門家、科学者、政治家、自然保護団体

代表者らが集結しました。会議の構成 は、会議本体、現地視察、内部打ち合 わせというものでした。会議本体では、 ブリヤート共和国議会議長のミカエ ル=セミエノフ博士、ドイツ副環境大 臣のジラ=アルトマン氏らのスピーチ を皮切りに、「水質:未来への挑戦」を 議題に意見が交わされました。また、

「湖沼地域における水質と自然保護」を テーマとしたパネルディスカッション では、滋賀県立大学の井手助教授がパ ネリストとして参加され、琵琶湖の水 質について紹介されました。(写真) 現地視察では、バイカル湖に流入する セレンガ川沿いの製紙工場を視察しま した。過去に同工場からの汚水がバイ カル湖の汚染源になっているとの指摘 を受け、現在では汚染水をセレンガ川 に流さない等の努力がされているよう です。内部会議では、メンバー候補の 湖からプレゼンテーションがあり、ラ グーナ湖(フィリピン)が新たにリビング レイクスのメンバーとなることが承認 されました。

次回のリビングレイクス会議は2002年 の春にアルゼンチンのマーチキータ湖 で開催される予定です。

.

世界の湖沼保全 バーチャルリアリティ展示

滋賀県立琵琶湖博物館の当委員 会のブースを今年4月1日に日本財 団の支援によりリニューアルし、 世界湖沼の6つの問題(富栄養化、 有害物質による汚染、酸性化、土 砂の堆積、水位の低下、生態系の 破壊)を立体的で臨場感ある3D映 像で判り易く紹介する展示が人気 を集めている。

湖沼環境の問題は、専門的な知 識や用語が難しく、一般の人々に とってなかなか馴染みにくかった が、今回の展示は、湖沼の環境問 題を人々の視覚に訴え、体験者が あたかも世界の湖沼を実際に探検 している錯覚に陥るほどリアルに 判り易く描かれている事から、お 年寄りから小さな子供まで楽しま れている。

世界湖沼会議への参加者も是非、 この機会に世界の湖沼環境の深刻 な状況を実際に体験していただけ ればと思います。

場 所 : 滋賀県立琵琶湖博物館 1F ILECブース 開館時間:9時30分 ~ 17時 (月曜日と祝日の翌日は休館)



船に乗った感覚で湖沼の映像に見入る子供たち



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

Secretariat

1091, Oroshimo-cho, Kusatsu-city, Shiga 525-0001, Japan

Tel: +81-77-568-4567 Fax: +81-77-568-4568

e-mail: info@mail.ilec.or.jp URL http://www.ilec.or.ip/

財団法人 国際湖沼環境委員会事務局 〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 TEL: 077-568-4567 FAX: 077-568-4568